ぬ～べ～転勤する

ハタボー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぬ～べ～転勤する

【Ｎコード】
Ｎ７４４７Ｘ

【作者名】
ハタボー

【あらすじ】
九州で半年を過ごしたぬ～べ～が再び転勤する。転勤場所は天の川小学校。ぬ～べ～は、そこで霊力がまったく無い（自称）少女の先生となって事件に巻き込まれる彼女を中心とした生徒たちのために事件を解決するために奔走する。
これは原作と設定、時系列のずれ、雰囲気、性格などが変わっています。ご注意ください。また、勢いと気分転換に書いているもので、最後までいけるかどうかわかりません。しかもギャグがうまく書けないので、面白くないかもしれません。

最後に、初めての投稿なので酷評などは遠慮してください。もちろん、アドバイスはありがたいです。

では、楽しんでください。

プロローグ（前書き）

かなり短いです。

ちなみにぬ～べ～は、原作の最後に行く予定だった九州の学校で半年間過ごしていました。

プロローグ

九州のとある小学校の校長室。
古びた二つのソファに、初老の男性と特徴的な眉毛をした若い男が座っていた。

「それで、転勤ですか。」

「ええ、あなたが転勤してきてまだ半年ですが、どうしてもと先方から連絡がありまして。」

「分かりました。しかし、二学期の途中からでもいいですか？」

「その点は、既に先方にも伝えてあります。向こうも二学期に入って異常に気付いたようで、話はつい先ほど向こうの校長から直接連絡があったのですよ。ですから、急な話ではあるのですが、受持ちのクラスがない鵺野先生に至急行ってきて欲しいのです。」

校長は急な転勤話で申し訳ないのか、気まずそうな顔をしながら鵺野先生を見た。
当の鵺野は、少し迷った様に視線を左右に振った。

「しかし、それではこちらを空けることになります。確かに大元は断ちましたが、まだ妖怪が出る可能性もあります。」

「ははは、大丈夫ですよ。学校の超常現象もすっかり止んで、校内も明るくなりました。ここ二ヶ月は悪さをする妖怪もいませんし、大丈夫でしょう。」

おかげで体調も治りました。という校長を見ながら鵺野は苦笑を浮かべる。
春に赴任したばかりの校長はガリガリに痩せて、去年現れた疫病神がまたやってきたかと除霊しそうになったのでる。

「・・・では、妹と妻をここに残しておきます。妹は、ここに慣れてきたのでここで卒業させてやりたいですし、妻は頼りになりますから、大抵の事は大丈夫でしょう。」

義妹眠鬼は、既にパンツが無いと力が出せないという弱点を克服して力も兄達に負けない程になっていた。
また、妻ゆきめは、安定した妖術だけでなく、春から始めたアイスクリーム屋の店員達妖怪も付いている。
逆に鵺野の方が、戦力的に劣るといっていい位である。

「そうですか。新婚のお二人を離れ離れにするのも気が引けますし、無理にここに残すことはありませんよ。とにかく、あっちの学校のこと頼みましたよ。鵺野先生。」

「お任せください。」

若い男鵺野鳴介は、ドンと胸をたたいた。

そして、数日が過ぎる。

プロローグ（後書き）

こんかいの登場人物は、男二人だけ。

主人公はの名前だけで、わかりますよね？

でも、新しく行く学校の名前だけで原作がわかる人がどれだけいるのか。

私は、まったく知りませんでした。

次は、８月末まで飛びます。

第一話　ぬ～べ～との出会い（前書き）

ぬ～べ～とさつきとの出会いです。
時期は第四話くらい死者からのピアノ曲　エリーゼぐらいです。

第一話　ぬ～べ～との出会い

宮ノ下さつきは、父と弟の三人家族である。
東京で数年過ごして来たが、急に父が母方の実家に引っ越すことを決めたため、東京から離れて天ノ川小学校に転校してきたばかりだ。
父は土木関係の仕事で家事はできず、弟はまだ幼いため任せるのにはちょっと頼りなく感じているため、家事はもっぱらさつき一人でやっている。

もちろん、夕食の買出しもさつきの仕事。
毎朝のチラシをチェックして、頭の中で考える献立を決めている。
今日は、二十円程安いジャガイモに、十円ほど安いニンジン、お買い得商品のルーと飲み物を買いに隣町のスーパーまで学校帰りに寄っていた。
スーパーで買い物を済ませ、帰ろうという時に近くの米屋で徳安を発見。
小躍りしたくなるほど安かったため、十キロを買って、店を出て十メートル程歩いた所で後悔し始めた。

「重い、買いすぎたー。」

さつきは、自分が持っている袋を恨めしげに見つめる。

「ルーは良いとして、ジャガイモ一袋にニンジン五本、ジュース１．５？が三本に米１０？は多かったー。でもなーお買い得だったし、うー。」

重みに耐え切れずに、戻ってきたスーパーの外のベンチに置いた。

そして、どうしたものかと頭を捻る。

「バスはもったいないけど、家まで持っていけそうにない。」

もったいないの精神は大事だ！と気合を入れて再び持とうと袋に手を伸ばす。

「ちょっと、君。」

後ろから声を掛けられた。

「はい、なんですか？」

さつきが振り返ると、黒い上着を着た長身の男が立っていた。
まだ若く、二十代くらいだろうか。
特徴的な長い眉毛で、美形といっても遜色ない顔立ちをしている。

「天ノ川小学校はどこか教えてくれないか？」

片手に紙切れを持っている。
クシャクシャに丸め込まれたその紙は、大して役に立たなかったのだろう。
困ったその顔は、どこか人の良さを感じさせた。

「ここから距離があって、近くにすんでますから案内しますよ。」

にこやかに笑って買い物袋を持とうとすると、後ろから伸びた黒い手袋をした左手がジュースの袋を、右手が米袋を持った。

「・・・」

「案内してもらうから、その礼に持つよ。」

人の良さそうな笑顔がさつきの無言の問いに答えた。

「よろしくお願いします。」

軽く一礼して、帰路についた。

「へえ、君も最近引っ越して来たのか。」

「はい。両親の実家がこっちにあって、父が急に戻りたいって言ってこっちに来たんです。」

「ここってことは、天ノ川小学校に転校？」

「はい。弟も一緒に。」

何もしゃべらないのは、とぽつりぽつり話していた二人は、いつの間にか談笑するくらい仲良くなっていた。

「二学期からとは、お父さんも思い切ったな。まあ、俺も急に言われて引っ越して来たから人の事は言えないけどね。」

「ははは、でもお父さんは急でしたよ。何も言っていなかったのに、夏休み入る直前、『お母さんの実家に帰ろう』でしたから。」

「ん？仕事じゃなかったのか？」

男は、訝しげに特徴的な眉を顰めた。

そのことに気付かず、さつきは話を続ける。

「はい。朝起きてから難しい顔をしていて、朝食の時いきなり言ったんです。前の夜は普通だったのに、まるで夜中誰かに言われたみたいに。」

「へえ、もしかすると予知夢か誰か枕元に立ったのかもな。」

笑い飛ばすかと思った話に、変な反応を示されて、さつきは足を止めた。

「予知夢などは、そこまで珍しいものでもないからな。大人でも信じる人はいると思うし、案外馬鹿にしたものでもない。枕元に立つ方は、その人の希望が具現化してたりするが、どちらかの霊力が高いと実際にできるらしい。」

真剣な顔で言う男。

さつきは、馬鹿らしいと思う反面、自分が最近体験していることから完全に馬鹿にできなかった。

だが、妖怪たちのことを言うわけにもいかなかった。

「え、え～と、結婚しているんですか？」

とっさに話題をそらすことにした。

強引すぎたかなと思っていると、男は顔を赤らめて左手を頭の後ろにやった。

「いや～。」

「結婚してるんですか。」

少し意外であったが、優しそうな感じから別におかしくないかなと思いなおした。

「少し事情があって、妻と義妹は九州にいるんだ。」

そう言いながら胸ポケットから一枚の写真を取り出して、さつきに見せた。

写真には、男を挟んで水色の髪をショートにして、白い和服を着た少女、もう片方はスタイル抜群の少し変わったツインテールの少女が移っていた。

二人とも十代半ばぐらいでかなりの美少女である。

「え、ええ～！！こんな美人と！」

「どうだ、両方綺麗だろ？こっちの青い髪の方が妻のゆきめ。もう片方が妹の眠鬼だ。」

「・・・妹さん何歳ですか？」

奥さんの方は突っ込むのを避け、妹の方を聞いた。

「ん～何歳だったっけな？・・・まあ、今小６だな。」

小６！？　こんな体型で！？

驚愕するさつきを置いて、再び歩き始める男。

眠鬼は、胸がDカップぐらいで、一般小学生どころか中学生以上のスタイルを誇っている。
かつて、童森小学校に現れた時も男子の視線を集めていた程の美少女である。
さつきも体型を気にする年頃である。
眠鬼の体型を見てぶつぶつ呟いていたが、立ち直ったのか、「どっこいしょ〜！」と掛け声を上げて、気合を入れなおした。

「大丈夫か？」

男の呆れ半分気遣い半分の声に、慌てて周りを見回すと既に学校の前であった。
いつの間にかここまで来ていたらしい。

「ふうん、ここが天ノ川小学校か。今度は家か。学校からこっちの方角だな。君は一緒の方向か？」

「あ、さつきです。宮ノ下さつき。はい、同じ方向です。」

「ははは、家も同じ所だったりしてな。」

「まさかー。」

二人で笑い合ったが、そのまさかだった。

「本当に同じ所とは。」

男の家は、さつきの家の隣であった。

どうやら男を呼んだ人物の伝手で、空き家を用意して貰ったらしい。

「ははは、ほんとですね。」

さつきも乾いた笑い声をあげた。

「はい、荷物。」

「ありがとうございます。」

いつの間にかすべての袋を持っていた男から、袋を受け取った。

「じゃあ、気を付けてな。」

男はそういうと、隣の家に入っていった。

さつきは、それを見届けて家に入った。

「あ、名前聞くの忘れてた。」

第一話　ぬ～べ～との出会い（後書き）

はい、主人公二人の出会いです。

ゆきめさんと眠鬼さんの出番はあるんでしょうか。

今のところ出す予定はないんですが。

次は、旧校舎の登場です。

新任槇野鳴介（前書き）

宮ノ下敬一郎の年齢が分からなかったので、小学2年生という設定にしています。

新任鵺野鳴介

さつきと出会った次の日の朝。
鵺野は、校長室にいた。

「では、鵺野先生よろしくお願いします。」

「こちらこそお世話になります。」

鵺野は校長との挨拶を終えて、校長室を出た。

「あ～、緊張した。」

鵺野は校長室を出て、深く息を吐いた。

「でも、なんで霊能力者ということは秘密のしておかないといけないんだ？」

校長から鵺野は、霊能力者の事や妖怪退治のことはあまり公にしないよう念を押されていた。
今まで自分から名乗っていただけに変な感じがした。
一応旧校舎の鍵や学校の噂については教えてもらった。
今日は授業がないため、早速調査に向かうことにした。

「二学期が始まってこの二週間で、新校舎の全トイレが突然同時故障。体育館への落雷。点検したはずの旧講堂でバスケットゴール落下と梁が折れる。旧講堂脇の木への落雷。そして、最後に昔から旧校舎にお化けが出るという噂。最後はともかく他のは事故や偶然にしては出来過ぎてるな。」

霊の仕業の可能性はあるな。と、まずはトイレの一つに入った。
「いやあ、緊張して朝からトイレにも行ってなかったんだよなあ。」
一人で照れながら、トイレを済ませる。
手を洗って、懐から霊水晶を取り出した。
「・・・霊気は残ってないか。」
期待していなかったのか、落胆もせずにトイレを出た鵺野は、事故や落雷したところを見て回ることにした。

ここ5年3組では、新しい先生が噂になっていた。
「そうそう。事故の現場を見て、学校の安全確認をしてたよ。」
「あ～私も見た。修理中の体育館を見て、工事の人と話してた。」
「俺は、旧講堂に入るのを見たぞ。」
トイレの故障や落雷、バスケットゴールの落下など、天ノ川小学校では、事故が続発しているのを受けて、教育委員会から調査員兼教師が来たと噂が流れていた。
実際、新任の教師らしき黒い上着を着た男が事故現場で確認されたことから、噂の信憑性と話題性が上がっていた。

その噂の中で、5年3組の3人は、6年生と2年生を1名ずつ加えて内緒話をしていた。

「調査しても無駄なのにな。」

活発そうな少年が、少し嫌味っぽく噂の教師の努力を否定した。

「しかし、異常であるだけに、僕と同じく心霊現象研究家という可能性もありますよ。」

眼鏡を掛けた、たらこ唇が特徴的な少年が人差し指を立てて言う。

「まっさかあ。だって、私達以外誰も知らないはずよ。」

「そうですわね。トイレは普通に直りましたし、劇も成功しました。」

さつきと上級生であるピンクのリボンを付けたおっとりとした少女が眼鏡の少年の言葉に反論する。

「それこそですよ。確かに多いかもしれませんが、調査員が派遣される程ではないと思うんです。」

「まあ、心霊研究家でも役に立たなんじゃ一緒だろうよ。それより、ピアノの止め方を考えないと。」

そう、5人が集まった理由は、昨日さつきが聞いたお化けピアノのエリーゼをどう防ぐかを話合うためであった。

さつきは、昨日の放課後と夜に一回ずつエリーゼを聞き、後2回で死んでしまうのである。

「昨日から考えてたんですが、音なら耳栓をして聞かなければいいんですよ。」

眼鏡の少年柿ノ木レオが、今朝買って来たらしい耳栓を取り出した。

袋には、『強力！！　あの選挙カーも工事の音も完全シャットダウン！』と書かれてあった。

「おお、これなら聞かなくて済むな。」

「レオさん、すごいです。」

「ありがとう。」

思わぬ名案に、3人は喜び、対策会議は解散と相成った。

こうして、1日目は鵺野とさつき達はすれ違った

新任槲野鳴介（後書き）

次回は、天邪鬼の登場です。

天邪鬼、同族を見かける。（前書き）

私が思う学校の怪談の裏の主人公天邪鬼がやっと出てきます。

おそらくこの小説で天邪鬼の出番は、原作より多くなると思います。

というか、したい。

天邪鬼、同族を見かける。

天邪鬼は、天ノ川小学校に出る妖怪達でも特殊な存在である。

人間が居ないと力が弱い妖怪。人間がいると大抵強い妖怪。

外に行っても戦闘系種族である鬼の中でも特殊な存在。

そして今は、畜生（黒猫）の身。

カーヤと呼ばれている黒猫に霊眠させられた後、さつき達には強気に出ていた。

だが、内心不安でいっぱいだった。

天ノ川小学校の人間に害を与える妖怪達は社交的ではなかったため、比較的しゃべるのが好きな天邪鬼は、無害な妖怪達と元々仲が良かった。

天邪鬼は、猫の身に霊眠させられたことによって、その妖怪達に嫌われることを恐れていた。

「へっ、怖れを栄養にする天邪鬼様が恐れるなんてな。」

自嘲しながら、目の前の古い校舎を見上げた。

通常の弱い妖気ではなく、嫌な妖気を放っていた。

また、何かが霊眠から目覚めたようだ。

「そういや、昨日、家で同じ妖気を感じたな。」

自分が霊眠している猫を飼っている少女を思い浮かべた。

グチグチ言いながらも天邪鬼を家に置き、きちんと餌もくれる少

女。
そして、その弟で、天邪鬼を妖怪とすら思っていない幼い少年。
天邪鬼は、霊眠させた変な姉弟に恨みを抱きつつも、感謝や興味といった感情も抱いていた。
はあ、と息を吐きつつ、目を閉じて感覚を鋭くしていく。
嫌な妖気の出所を相手に気付かれないように慎重に探っていく。
人間に害を与える妖怪の一部には、同じ妖怪にも牙を向くものがいる。
怖れを少ししか取り込めない今の身では、対抗できる程力が持てない。
妖気は、音楽室から出ていた。
「音楽室、呪いのピアノか。」
対処の仕方は知らない、あいつらが助けを求めてきても助言はできないな。
さて、どうするか見させてもらうか。
強い妖怪がいるので、会いたい連中にも会えそうにないと、家に戻ろうとした時であった。
「っ！？」
視界の隅に新校舎から出てくる男を見かけた。
嫌な予感がして男をはっきり見た途端、天邪鬼は後ろを向いて全力で走り、いや、逃げ始めた。
「なんで、なんであんなのがいるんだ！」
呪いのピアノみたいな嫌な妖気ではない。

圧倒的な威圧感を感じさせるくらい濃密な妖気である。
ここのボスみたいな妖怪である逢魔は、嫌な妖気の塊みたいなものだ。
純粋な戦闘力というより、妖怪を操る小細工みたいな妖力。
だが、あの、あの左手から感じた妖気は、純粋な戦闘力の塊。
あれは、同族である鬼の力だ。
同じ鬼であるのに絶望的に差がある力を目のあたりにして、天邪鬼は妬みと恐怖を感じていた。

「シャレになんないぞ、あれは。」

全力で家に着いた天邪鬼はブルリと体を震わせると、勝手に作った寝床の毛布に入り込んだ。
そして、先ほどの事を忘れるためにも一眠りすることにした。

天邪鬼、同族を見かける。（後書き）

さて、天邪鬼はぬ～べ～をどうするんでしょうか。

『エリーゼのために』のエリーゼは、テレーゼかエリザベートらしい（前書き）

小学生組が出て来ない。

『エリーゼのために』のエリーゼは、テレーゼかエリザベートらしい

鵺野は、現場を一通り見て回り、最後の場所、旧校舎に来ていた。
今まで見て来た現場は、霊力が無いまたは、ほとんど残っていなかった。
だが、霊力から見て妖怪が関与していたことは分かった。
そして、ここ、旧校舎は妖気が霊水晶を見ずして分かるほど霊気が漂っていた。

「邪悪な霊気だな。」

慎重に旧校舎に入った。

「ん？これはいったい。」

邪悪な霊気とは別に違和感を感じる霊気に、龍脈に流れる自然的な霊気が感じられた。
鵺野は、旧校舎を見て回りつつ、旧校舎に出るというお化けは、違和感の方の霊気だと感じられた。
つまり、この邪悪な霊気は、元々いた複数であろう妖怪を遠ざけるほど力が強い。
自然と力が入るのを抑えて、霊気の元を探り当てた。

「音楽室か。」

なぜか音楽室の前に段ボールがあった。
気にしながら、扉を開けた。
音楽室は、がらんとしていた。

埃被ったピアノと壁に一枚の絵。
ほかの楽器は、新校舎にでも移したのか、何も残っていなかった。
?～?.?.?～♪
だが、鵺野が音楽室に入った途端、ピアノがメロディを奏で始めたのである。
『エリーゼのために』これを４回聞くと死ぬという噂があるのを鵺野は知っていた。
「霊水晶よ、妖怪を映し出せ！」
左手に持った霊水晶が光を放ち、ピアノではなく、壁の絵を照らした。
「っ！？」
絵のベートーベンが、絵から抜け出してきた。
鵺野は、念珠を取り出してお経を唱えようとした。
バチッ
青い火花が走り、念珠を吹き飛ばした。
「・・・いきなり呪いをかけてくるとは。覇鬼、力を借りるぞ！」
黒い手袋を外し、鬼の手を曝す。
すると、鬼の手が伸びてベートーベンの形をした妖怪を切り裂いた。
なんともあっけない終幕である。

『鳴介、あとでおいしいもの寄越せよ。俺は眠い。家についたら起こせ。』

一撃で妖怪を退治した鬼の手から声がして、勝手に手袋が飛んできて鬼の手を再び隠した。

「はあ、また金欠か。」

鵺野は、財布を覗き込んでため息をついた。

『エリーゼのために』のエリーゼは、テレーゼかエリザベートらしい（後書き）

思ったよりというより、たった数行で戦闘が終わった。
書いたこっちがびっくりした。

あれ？妖怪は？（前書き）

こっちは、小学生組

あれ？妖怪は？

夜、さつきはベットで耳栓を手に悩んでいた。
昼間はナイス案だと考えもしなかったが、昨夜の出来事を思い起こして、こんなもので防げるのか不安になったのである。
昨夜ピアノは、電話機、オルゴール、ラジオと様々な媒体を通してエリーゼを聞かせてきた。
そんなピアノが、耳栓ぐらいであきらめるだろうか。

「ええーい、もう寝よっ！」

さつきは考えるより行動派であった。
布団を深くかぶって寝転がる。
ギュッと耳栓を握りしめて、天井を見つめる間に寝入ってしまった。

「で、何も起きなかったのですか？」

「そうなの。朝までぐっすり。もう、出ないんじゃない？」

さつきは、嬉しそうにくるりと一回転した。
それを見て、青山はじめはため息をついた。

「お前なあ、まだ昨日の夜だけだろ。」

「そうですね。心霊現象は、油断した所で襲いかかってくるものです。」

レオがはじめの言うことに、うんうんと頷きながら言った。

「お姉ちゃん大丈夫なの？」

敬一郎が涙目になってさつきを見上げる。

「そいつはもう居ねえよ。」

突然、上から声が聞こえた。

さつき達が見あげると、自動販売機の上に天邪鬼がいた。

「居ないって、どういうことよ？」

「そのままさ。お前に呪いを掛けていた妖怪はもう居ない。」

「それはおかしいですね。一度掛けた呪いを放っておいて居なくなるという行動はしないはずです。」

天邪鬼の言うことに眼鏡をクイッと上げながらレオが反論する。

「ああ、確かにな。だがな、妖怪同士の仲が良いとは限らない。赤紙青紙がトイレの花子さんを追い出したように、妖怪を喰ったり、殺したりする妖怪だっている。あいつは、同じ妖怪にやられたのさ。」

天邪鬼は嘲笑するように目を細めて口端を軽く上げる。

そして、息を飲むさつき達を面白そうに見ながら続けた。

「その妖怪がお前ら人間を襲う可能性はあまりないから安心しろ。ただ、一つ言っておくぞ。新任教師とやらに関わるな。後悔するぜ。」

最後にまたニヤッと笑いを浮かべて、どこかの庭先に入っていった。

『・・・』

残されたさつき達は、あのピアノの妖怪をやった妖怪に寒気が走ると同時に、新任教師の忠告が気になって始業のチャイムが鳴るまで突っ立っていた。

ただ、昼休みに行った音楽室で粉々に砕けた絵があったことが、天邪鬼の信憑性を高めていた。

あれ？妖怪は？（後書き）

次からは、さつき達がぬ～べ～を調べ始めます。

対してさつき達にぬ～べ～の事を教えた天邪鬼は何を考えているのか。

少年探偵達、鵺野を探る（前書き）

今回は、天邪鬼は出てきません。

少年探偵達、槲野を探る

新任の先生に関わるなと天邪鬼に言われたことで、新任の先生を探ろうと話が出ていた。
昼休みに集まった5人は、屋上へ続く階段の踊り場で話し合いを始めた。

「なんでその先生について調べるのよ？」

「天邪鬼が言っていたじゃないですか、あのピアノの妖怪をやっつけたのは別妖怪だって。それが新任の先生なんですよ。」

「悪さをする前に正体を探って霊眠させるわけだ。」

「しかし、天邪鬼さんははっきり言ったわけじゃないですよ。」

「そうよ。天邪鬼が私たちを脅かしてるだけかもしれないじゃない。」

「ぬ～べ～、面白かったよ。」

先生を探ることを提案したレオとそれに賛成するはじめ。
それに対して、懐疑的な女子陣と反対らしい敬一郎。

「え？敬一郎、その先生の授業受けたの？」

「うん。体育で一緒にサッカーやったよ。」

「なあ、ぬ～べ～って名前か？」

「自己紹介でぬ～べ～と呼んでくれって。」

さつき達は、実際に会っている敬一郎から話を聞き出した。

「つまり、本名は鵺野鳴介あだ名はぬ～べ～。眉が太くて長く、左手に黒い手袋をはめた面白い先生か。」

聞き出せたは、明るく面白いという印象だけだった。

「では、こういうのはどうでしょう。放課後、僕とはじめで先生をつけてみます。それで、明日の朝に報告しますよ。」

「私たちは？」

「あまり大勢と行くと気づかれますからね。ここに詳しくて逃げやすい僕らがいいでしょう。」

さつきと桃子はここに来てまだ半年も経っていないため、地理に疎い。

その点、一年からここにいるレオとはじめは、男ということもあり、あちこち探検して逃げ道くらいたくさん作れるはずである。

それに、さつきと敬一郎は運動音痴、桃子も運動が苦手な方に入る。

監視と逃げるだけならレオとはじめだけの方が効率的であった。

「じゃあ、俺たちがしっかり調べてきてやるよ。」

「明日を楽しみにしておいてください。」

放課後、はじめとレオは、鵺野を監視していた。
鵺野は、旧校舎の裏手で何かを調べているようだった。
二人は授業が終わると、急いで探し始めて、やっと見つけた時には既にそこにいた。

「何やってんだ？」

「う～む、縄張りでも作っているのでしょうか？ピアノの妖怪も倒しましたしね。」

茂みから観察しながら考えているうちに、鵺野が立ち上がった。
音をできるだけ立てないようについていく二人。
鵺野は、今度は旧校舎の横手に座り込んで何やら調べ始める。

「ほら、やはり縄張りですよ。」

レオが自慢げに胸を張るが、猫や犬じゃあるまいしとはじめは半信半疑のようだった。
でも、とはじめは鵺野を見ながら思う。
敬一郎の話を聞いて、気になっていたのは左手の黒い手袋である。
確かに鵺野の左手には不自然な黒い手袋がはめてあった。

「ん、なんだ？」

一瞬、鵺野が左手に話しかけているように見えた。
レオは、自説を自慢げに話していて気付いていなかったようだ。

「・・・怪しいな。」

「ええ、怪しすぎます。だいたいがですね、ここに来ること自体、ほかの先生はあまりしないんです。妖怪を信じてなくても少し不気味ですから。」

「ああ・・・」

見間違いかもしれないと、再び鵺野に視線を戻した。
もう一度見えたらきちんと言おうと、目を瓶の底のように見開く。

「あ、また移動するみたいですね。」

今度はどこに行くのか。
気づかれないように追いかけていると、旧校舎正面に曲がって行くのを最後に見失ってしまった。
旧校舎の前には、広場しかない。

「ということは、旧校舎の中かー？」

苦い顔で旧校舎を見上げるはじめ。
旧校舎にはいい思い出などなかった。
あそこに行くといつも命の危機に曝されている。

「入りますか？」

レオも困った顔ではじめを見た。

「・・・というか校舎で尾行できるのか？」

あ、とレオも気付く。
旧校舎は足音が響く上に、隠れるところが少ない。
仕方ないよな、と出てくるのを隠れて待つことにした。

「・・・で、出て来なかったと。」
さつきは、腰に手を当てて二人をにらんだ。
昨日の二人の報告を、登校中に聞くうちにさつきの機嫌が悪くなっていった。
「仕方ないだろ。待っても待っても出て来なかったんだから。」
事実、鵺野は一時間待っても出て来なかった。
「収穫ないのに変わりないでしょ。いいわ、次は私が探って見る。」
フンッと両手に拳を作って気合を入れるさつき。
「私も同伴させてください。」
桃子もさつきが心配なのか、興味があるのか、同行することになった。
「じゃあ、放課後にやるわよ。」

少年探偵達、鵺野を探る（後書き）

はい、今回はここまでです。

次は、ぬ～べ～とさつきの再会ですね。

再会したけど（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。初めての投稿でもらえるとうれしいものですね。

さて今回は、さつきと桃子のターン。

さつきと桃子はぬ～べ～から何を聞き出せるのか。

再会したけど

さつきと桃子は放課後合流すると、鵺野を探すことにした。
と言っても探す必要すらなく、教員は全員会議に出席していた。

「なんで会議なんてやってんのよ。」

せっかく気合を入れたのに水を差された形になったためか、さつきは怒っていた。

「まあまあ、さつきさん落ち着いてください。たぶん、午後に起こった事故のせいですわ。」

「事故？」

「はい。運動会の練習中に不可解な事故があったそうです。それで、その競技を中止するかどうかの会議だそうです。」

ん？とさつきが首を傾げた。
たった一回の事故で中止するかどうかの会議を行うなんて変かも。

「どんな事故だったの？」

「それは・・・」

「それは、使う器具が壊れただけだ。」

二人の会話に誰かが割り込んできた。

「あら・・・」

さつきの後ろから掛けられた声に振り替えると、先日見た男の人が立っていた。

「え？なんで・・・」

「よっ。久しぶりだな。」

にこっと笑って片手を上げる男。

「今度新しく来た体育教師の鵺野鳴介だ。ぬ～べ～って呼んでくれ。え～と、」

ぬ～べ～の後ろの扉から他の先生方が出て来るのが見える。

どうやら会議は終わったようだった。

「六年の恋ヶ窪桃子と申します。よろしくお願いします。」

「え、ええっと、5年3組の宮ノ下さつきです。」

「ああ、よろしく。さつき、この間はありがとう。助かったよ。おかげで次の日に遅れなくて済んだ。」

「いいえ、こちらこそ荷物持ってもらいましたから。」

親しくまでとは言わなくても、知り合いだったらしい二人の様子に桃子は、

「お二人とも顔見知りなのに名前知らなかったのですか？」

「あはは、聞き忘れてた。」

「う。」

さつきは、痛いところを突かれたと胸を抑えた。

確かにさつきが知っていれば、話は簡単に進んだはずである。

「しかし、お前ら俺に用事があるらしいがどうかしたのか？」

「え、えーと。そうそう、ぬえ・・・ぬ～べ～、競技は中止になったの？」

いきなり会ったため、どういう風に聞くのを考えていなかったさつきは少し挙動不審になりながら話題を考えついた。

「ああ、そのことなんだが、障害物競走はなくなった。まあ、道具を今から修理しても間に合わないと見たからだが、他の競技でも小さい怪我や事故が多くなっていることから、運動会自体中止しようという意見も出てたな。お前たちも練習中は気をつけろよ。」

「どうかしたの？」

ぬ～べ～の顔がやけに真剣であることが引っ掛かったさつきは、ぬ～べ～の顔を覗き込むように聞いた。

「いや、今回壊れた障害物の機材は今年注文したやつでな。」

「壊れた理由がわからないんですか？」

桃子も真剣な顔になってぬ～べ～に聞いていた。

「壊れた理由か？支えになっている木材を縛っているロープの数か所が切れていたことが原因らしい。」

「それって・・・」

「ああ、誰かの悪戯かと思ったが、授業前に点検した教師によるとロープは切れていなかったらしい。確かに数名の教師が見ていたから確かだ。」

人の仕業ではないとすると、さつきの思考が妖怪の仕業に結びついた。

桃子もそう思ったのか、さつきに目配せしてきた。

「一度全ての道具をチェックするようだから今後からそういうことはないだろうから安心しろ。他に何か聞きたいことはあるか？」

「いいえ。質問に答えていただきありがとうございました。」

さつきが答えるより早く、桃子が頭を下げた。

そして、さつきの手を取った。

「ああ、いつでも聞いてくれ。気を付けて帰れよ。」

「し、失礼します。」

桃子に手を引かれながら、にこにこ笑って見送るぬ～べ～に軽く頭を下げた。

「どうしたの？桃子ちゃん。」

ぬ～べ～と別れて、屋上に続く怪談までやってきたさつきは、急に話を止めて手を引いてきた桃子に聞いた。

「すみません考えごとを少ししていたものですから。でも、ぬ～べ～先生のことについてあそこで聞けませんから、あの辺りで帰ってきて良かったと思います。」

「ぬ～べ～先生・・・まあ、いいか。考え事ってロープの話？」

「はい。5年生と6年生があの障害物の道具を使うのですが、昨日の私達の授業で新品だったのです。それにその時は、何もありませんでしたたら、もしかしたらと思いまして。」

「霊の仕業？先生も確認してたって言ってたしね。確かに霊の仕業かもしれないわね。」

これはぬ～べ～を調べてる場合じゃないかも、と呟くさつきだったが、何も思いつかない。

それを見て、困った笑みを浮かべていた桃子は、ポンと手をたたいた。

「お化け日記を見てみたらどうでしょう？運動会にしか出ない妖怪がいるかもしれません。」

「分かった、帰ったら調べてみる。」

こうして大した収穫がないものの、新たな妖怪の影を見つけた二人だった。

「あー！」

一緒に帰ろうと各自の教室に向かおうとした途端、さつきが大声を上げた。

「どうかしました？」

「今日、日直だった。ごめん、桃子ちゃん先に帰ってて。」

そう言って桃子と別れたさつきは、急いで教室に向かった。

夕日が差し込む誰も居ない教室に思わず入口で立ち止まるが、すぐに入って教卓の上にある日誌に手を掛けた。

「あれ？」

そこで、男子の日直が居ないことに気付いた。

仕事を終えたのかと思ったものの、日誌がここにあるのは可笑しく、黒板も綺麗になっていなかった。

日直の男子の席を見ると、鞄は無くなっていた。

「てことは、帰ったのー。」

ぐたっと教卓にへたり込むさつき。

すると、クシャっと紙が潰れる音がポケットから聞こえた。

入れた覚えがない紙の音に、取り出してみると、中に『旧校舎校長室で待っています。』と丁寧な字で書かれていた。

「・・・」

ボンッと赤くなる顔。

内容はそっけないものであったが、これはいわゆるラブレターかと思ったさつきは、慌てて教室を見渡して誰もいないことを確認する。

「って、あれ？」

周囲を見渡して誰も居ないことに安心して、思考に余裕が出て来たさつきはおかしいことに気が付いた。

下駄箱や引き出しならともかく、ポケットにさつきに気付かれないように手紙を入れるなんて普通あまりできない。

それに、あの旧校舎というところが引っ掛かった。

旧校舎にお化けが出るという噂は全校生徒が知っており、告白に使うなんてことはしない。

一瞬、幽霊かと思ったさつきだったが、もっと現実的な結論に至った。

「はじめか天邪鬼ね。私をからかって遊ぶつもりなのね。」

目が吊り上がって怒り心頭のさつき。

放っておこうと思ったが、それより分かって行って驚かない方が嫌がらせになると行くことにした。

でも、ちょっとした嫌がらせも兼ねて日直の仕事をこなしていくことにした。

再会したけど（後書き）

次は、さつきのターン。

さて、旧校舎で待つのは誰なのでしょう。

提案

日直の仕事を嫌がらせもあってのんびり済ませたさつきは、日誌を担任に渡した後、荷物を持って旧校舎に向かった。
既に時間は五時近く、帰りを促す放送委員の放送を聞きながら旧校舎に入る。
旧校舎にはよく人体模型や人面犬といった妖怪がうろついていることがあるため、さつきはビクビクしながら校長室を目指す。

「・・・なにもいない。」

廊下はシンと静まり返っており、人っ子一人どころか、お化けすら見当たらない。
そうこうしているうちに、校長室の前まで来たさつきは、ごくりと息を飲んで、扉に手を掛けて一気に開いた。

「はじめ！それとも天邪鬼？居るのは分かっているのよ！って、あれ？」

「やっと来たか。」

気合を入れて開けた先に待っていたのは、ぬ～べ～だった。

「なんで、ぬ～べ～が？」

「いや、お前と少し話がしたくてな。」

そう言うぬ～べ～の手には、さつきの祖母の写真があった。

「ここの校長だったようだな。」

「はい。」

「この学校に赴任してからこの旧校舎を色々調べてみたんだが、この学校の下で二本の霊脈が交わっている。そのせいか、昔から魑魅魍魎が出ていたそうだが、それを封印していたのがさつきの母方の家の神山家だ。お前の曾祖母はその霊脈の力を有効活用しようとしてこの学校を建てて力を拡散させて、町への恩恵と外から来る妖怪への結界も兼ねているらしい。」

「え？え？」

「さつき達が今まで妖怪を霊眠させてきたこともここにいる妖怪に聞いた。どうやら神山家は、封印と霊脈の操作が得意らしいな。そして、聞きたいことが二つある。」

「は、はい。」

一気に説明させられてよく分かってないこともあるが、さつきも今まで父やお化け日記で知っていることもあり、大体は理解できていた。

「今まで使ってきた霊眠とやらの道具は、母親が使っていたものか？」

「えっと、そうです。」

天邪鬼も青紙赤紙もくたべの時も使ったのは、母が霊眠に使っていた道具である。

「・・・それを踏まえてお前に聞きたいのは、俺から霊能力修行を受けるかどうかだ。」

「でも、私霊感ないんですけど・・・」

「いや、ある。確かに多いわけではないが霊力はあるぞ。それにさつきの特性は、霊力の操作だ。だから、母親の霊力が残っている物で妖怪が霊眠できているし、霊脈の力も使っているみたいだぞ。それに教えるのは、万が一の時だ。」

「万が一？」

「そう。今のままだと強い妖怪や母親が使っていた物がない場合、霊眠できない可能性がある。俺がいればいいんだが、いつでもいるとは限らないからな。霊脈を使っているさつきは、妖怪に好まれやすい。護る術くらいは知って置く必要があると思んだが、どうだ？」

どうだ？と聞かれてもさつきの頭はこんがらがっていた。

その様子を察したぬ～べ～は、いきなり過ぎたかと頭をかいた。

「あ～すまん。いきなり過ぎたな。少し考えて見てくれ。あ、このことは人に言ったら駄目だからな。明後日にでも父親には会いに行くから、その時までに決めれたら決めといてくれ。」

そういうと、ぬ～べ～は旧校舎の外までさつきと一緒に行き、そこで別れた。

提案（後書き）

今回はここまで、次は男子組に移ります。

ぬ～べ～自身のことは、家でも説明時に明かします。

男の子の意地（前書き）

はじめ達の話

ダットです。

男の子の意地

放課後、さつきと桃子がぬ～べ～の元に向かっている頃。
はじめとレオは、一足早く帰り支度を整えて下駄箱にいた。
この後、どうするかを話しながら靴を履き替えていると、玄関に敬一郎がぽつんと一人立っているのに気がついた。
その顔は今にも泣きそうであり、悔しそうだった。
それを見たはじめは何があったかすぐに察して、ニッと笑った。

「敬一郎、リレーで負けたんだろ？」

ビクッと敬一郎の体が震える。
そして、泣きそうな気配が強まった。
はじめは、それを見ても笑みを浮かべたままでしゃべり続ける。

「しかも、自分が遅いせいで負けたと。」

「はじめ？」

レオが煽るはじめを怪訝な顔で見た。
だが、まだはじめのターンである。

「お前ら運動神経悪いからなあ。」

「うう。」

敬一郎がとうとう決壊しようとした瞬間、

「だが甘い！！　泣くな！！　まだ運動会まで時間があるんだ。男

だろ、意地を見せろ！　ほら、レオも行くぞ。特訓だあ！」

さっさと靴を履き変えたはじめは、レオを顎で促して運動場に向かう。

レオも後に続き、一人残された敬一郎も

「うん！　ありがとうはじめ兄ちゃん。」

表情が一変して明るくなり、はじめの後を走って追いかけた。

運動場に出たはじめとレオは、敬一郎の準備運動を手伝って走る準備を整えた。

「さて、敬一郎走ってみろ。ちゃんと見てアドバイスするから。」

「うん。」

敬一郎が気合を入れて走り出す。

運動場には誰もおらず、遠慮なく走ることができる。

「・・・」

「遅いですね。」

敬一郎の足は、小学2年であることも考えても遅かった。

「まあ、さつきの弟だしな。」

「そこまで変な走り方でもないんですけどね。」

二人はそこまで言うと、お互い目を合わせて、お互い準備運動を始めた。

言葉でいうより、自分たちの走りを見て学ばせた方が早いと思ったのだ。

遠目に、夕日の中で敬一郎が一所懸命走っている姿が見えた。

なにか青春してるなとはじめ感心していると、もう一人が敬一郎の元に行くのが見えた。

「あれ、ここ誰も居なかったはずじゃあ。」

体操を止めて見ていると、真っ白い体操服を着て白い鉢巻を締めたその男の子は、敬一郎を抜くとスピードを落とした。

そして、敬一郎が走るスピードをあげると、それに連れてスピードを上げる。

数歩前を走る男の子は、完璧に敬一郎に合わせていた。

「・・・誰でしょうか？」

「俺も知らねえ。でも敬一郎が速くなってるからいいんじゃねえか？」

隣のレオが、二人を見ながら聞いてくるが、はじめも知らない少年だった。

はじめとレオは、運動会の話をしながら二人が終わるのを待っていた。

実に十数分は走っただろうか。

二人が話していると、敬一郎が近づいてきた。

「はじめ兄ちゃん、は、速くなった？」

「ああ、この調子で毎日やれば、一位になるのも夢じゃないぞ。」

「そうですね。さっきの走りだけでも十分通用する速さだったと思いますし。」

「それより、あいつはどこだ？」

校庭には、はじめ達三人しか居なかった。
どうやら話している間に、帰ったようだ。

「さっきの人ならどこか行っちゃった。お礼言いたかったのに。」

敬一郎も知らないらしい。

「まさか心霊・・・」

「まあいいだろ。明日も練習するぞ敬一郎！」

「うん。」

『オー！』

三人は、片手を上げて掛け声を上げた。

「あ、ちなみにさつきには内緒にしようぜ。驚かしてやるんだ。」

「うん。」

「それも面白そうですね。」

にへっと笑い合う男子三人だった。

「ふふっ、楽しそうですね。」

男子三人の様子を、校門から桃子先輩が微笑みながら見ていた。

男の子の意地（後書き）

さつきだけ、敬一郎の特訓をしりません。

次は、ぬ～べ～と天邪鬼、かも。

私としては、学校の怪談で一番好きなキャラなので、なんとか頑張って貰いたい。

閑話　ぬ～べ～の内心（前書き）

読まなくても支障はないと思う内容。

自分の中での整理も兼ねてる。

閑話　ぬ～べ～の内心

ぬ～べ～は、さつきを見送った後、再び旧校舎の校長室に戻ってきていた。
この数日、旧校舎の周りを調べたり、中にいる妖怪と接触して会話を試みていくつかの情報を手に入れていたが、この校長室を調べて色々と分かった。
霊脈の存在と校舎の存在、神山家の存在もそうだった。
だが、裏山から学校に至るまでの土地の売買の話や神山家の衰退については、さつきには話さなかった。
それよりも、さつきの能力が気になっていたからである。

神山家は、霊眠と呼ばれる封印術を十八番として封印に長け、霊脈を護る家である。
だから、多少の霊脈の操作も可能であった。

しかし、さつきは、霊脈の力をほんの微弱ながら吸収している。
霊感が無いと言っていたが、それは引っ越し前の話であろう。
ここに来てから霊力は上がっているはずである。
残っていた文献によると、霊眠には妖怪の強さに合わせて霊力が必要らしい。
霊眠が解けた物体にさつきの母である佳耶子の霊力はほとんど残っていなかったはずである。
おそらくさつきは、母親の霊力と自分の霊力、霊脈の霊力を駆使して霊眠したのだろう。

ぬ～べ～が一番気になっているのは、その霊脈の霊力を使えることであった。
神山家が霊脈を使えるというのは、この旧校舎を使って霊脈から

無駄に出る霊力を効率良く拡散させることといった、儀式めいたものである。
直接操作など、ぬ～べ～クラスの霊能力者でも儀式無しや道具の補助無しでは無理であった。
「でも、どう指導したもんかなあ。」
霊力を感じさせることから始めなければならないが、暴走しないか心配しながら指導内容を校長室の椅子を見つめたまましばらく考えていた。

閑話　ぬ～べ～の内心（後書き）

さつきが、微妙に人間離れしてきました。

天邪鬼監視日記。二日で終わるけど（前書き）

今回は天邪鬼のターン

そういえば、前回の話で弟からさつきが強くなるか聞かれたけど、そこまで強すぎるほどにはならない予定です。

天邪鬼監視日記。二日で終わるけど

天邪鬼は、さつき達にぬ～べ～に関わるなと忠告してから、さつき達を見張っていた。
さつき達と付き合いが短い天邪鬼でもある程度性格は分かる。
意味深なことを言ったら、ほぼ確実にぬ～べ～を探り始めると予測していたのだ。
そして、さつき達を見張ることで間接的にぬ～べ～を探ることこそが天邪鬼の思惑だった。

しかし、最初にぬ～べ～を見て戦略的撤退（本人曰く）した天邪鬼が何故危険を冒しているのか。
それにはとある理由がある。

一度寝た天邪鬼の思考は、多少冷静になった。
そして、おかしいことに気が付いた。
それは、鬼の妖気だけではなく、人間の霊気も感じたことである。
鬼が人間に憑りついていることも考えたが、それでは霊気は感じない。

「あいつは、なんだ？」

その疑問が、天邪鬼に行動を起こさせたのである。

監視一日目

昼休みにさつき達が、屋上へ続く階段の踊り場で話し合いをしていた。
はじめとレオが、ぬ～べ～を探ろうとしており、さつきや桃子が反対までもしてないでも、積極的ではなさそうだった。
見ていて面白いものだったが、天邪鬼の思惑通りに探ることにしたようだ。

「だがなあ、あいつらにまともな尾行ができるもんかねえ～。」

呆れながらも面白い展開を望んで、放課後まで待つことにした。

はじめとレオの尾行は、見ていて滑稽だった。
二人は、下校しようとしている生徒たちから変な目で見られていることに気付きもしないまま、旧校舎までぬ～べ～の後をこそこそ物陰に隠れながらついていく。
不審に思うのは、ぬ～べ～である。
あれだけ戦闘力が強い鬼であるはずなのに気付く様子もないまま、旧校舎の周りを調べている。
そして、一度だけ黒い左手の手袋に話しかけるのを見逃さなかった。

その後、ぬ～べ～が旧校舎に入ったのを見て、天邪鬼ははじめ達から離れた。
その天邪鬼の目は、なにか確信したかのように細まっていた。

監視二日目

今度はさつきと桃子が直接探りに行くようであった。
放課後まで、町で猫たちをからかって暇を潰していた天邪鬼は、会議室前でさつき達が話しているのを見つけた。
木の上に上がって見ていると、何やら面白そうじゃない話をしているようだ。
周りにほかの教師がいることから、普通の話らしい。
しばらく、つまんなさそうに尻尾で寄って来る蜂で遊んでいたら、桃子がさつきをひっぱりながら離れる瞬間、ぬ～べ～が何かの紙をさつきのポケットに入れる瞬間を目撃した。

「あいつ、俺の獲物に手を出すつもりなのか？」

格の違いと自分の意地が戦いを始めた瞬間、ぬ～べ～から視線をそらした。
そして、木をもっと上ってさつきを探す。
さつきは、教室で先ほどの紙を読んでいた。

「ふん。」

鼻で笑って、木を降りて旧校舎の前の茂みに陣取った。

「おそらくここで話すはず。俺の獲物に手を出すなら・・・」

ブルブルブルと体を振って、その場に寝転んだ。
木陰と木陰の間から、太陽の日が天邪鬼を温める。
ふぁあと口を大きく開けて欠伸をしながら、旧校舎を見つめ続けた。

「はっ！」

目が覚めると、夕焼けが旧校舎を赤く染めていた。
いつの間にか寝ていたらしい。

「やばっ！　寝過ごした。」

きょろきょろと周りを見渡すと、向こうにある新校舎からも声は聞こえない。
生徒たちは、もう家に帰ったらしい。
慌てて茂みから飛び出すと、旧校舎からぬ～べ～が出てくるのが見えた。

「お？」

向こうにも気づかれ、近づいて来る。
天邪鬼は、軽く睨んで威嚇していたが、気にせず目の前に来た。

「天邪鬼か？初めまして。」

にこっと笑って話しかけてくる。

「なんで、俺の事を知ってやがる。」

「旧校舎の妖怪達が、君のことを心配していたぞ。顔くらい出してやれ。」

「・・・」

旧校舎の妖怪達と既に友好的になっているらしい。
そんなことより、言うべきことがあった。
「お前、俺の獲物に手を出すなら鬼だとしても相手してやる。」
フーッと威嚇し始める。
すると、ぬ～べ～が笑い始める。
「ははは、そんなにさつきの事が心配なのか。仲が悪いって言っていたが、さすが天邪鬼だな。」
「うるせえ、横から掻っ攫われるのが気に食わないだけだ。」
「そんなに人間を邪険にするな。どうやら、ここの妖怪は閉鎖的な奴が多いみたいだな。」
「人間が嫌いで何が悪い。」
「妖怪だから、人間だからで判断するなと言いたいだけだよ。」
ぬ～べ～は、しゃがみ込んで無造作に天邪鬼を撫でた。
いきなりの事で反応できずに、しばらくおとなしく撫でられていたが、我に返って後ろに跳んだ。
「俺はさつきに霊能力を少し教えるだけだ。天邪鬼もそこから出せるようになるかもしれないんだ。悪くはないだろう。だから、少しさつき達を助けてやってくれ。じゃあ、また。」
体を大きく見せて威嚇する天邪鬼を笑いながら、話すだけ話すと、

ぬ～べ～は「仕事残ってたんだ。急がないと！」と言いながら去って行った。

完全に向こうのペースだったことに気付いた天邪鬼は、がっくしと疲れた様子で家路についた。

天邪鬼監視日記。二日で終わるけど（後書き）

天邪鬼よりぬ～べ～のターンだったかな。

さつきの悩み（前書き）

今回は短いです。

さつきの悩み

「はい、運動会の話しか聞くことができなくて、すみません。」

「いや、それは意外と重要なことかもしれません。事故も心霊現象の可能性が高いです。」

登校時、桃子から昨日の報告を受けていた。
まともな話も聞けずに退散した桃子は、申し訳なさそうに話した。
それに対して、事故の原因が謎であることにレオが食いついてくた。
だが、はじめと敬一郎は、別の事に気を取られており、何の反応も示さなかった。

「・・・」

空は雲一つなく、晴天なのに、一人だけ暗いというか、変な空気を出している人物がいた。

「・・・」

『・・・』

レオと桃子も会話を止め、変な空気を出しているさつきを見つめた。
さつきは、会った時から黙って何か考えているようであったが、どことなく聞きづらいオーラを放っていた。
皆会った時からさつきの様子が変なのに気付いていたが、今まで

見て見ぬふりをしていたのである。
しかし、ずっとこの調子で、会話が途切れた今、無視できない感じになっていた。
「おい、敬一郎。いつからあんな感じなんだ。」
こそっとはじめが敬一郎に聞く。
レオと桃子も敬一郎に近づく。
その四人の様子にも気づいていないさつきは、考え込みながらのろのろ歩き続いている。
「昨日、帰ってきた時からだよ。夕食も変な味したし、朝食も焦げ焦げパンだった。」
朝の焦げたパンを思い出したのか、苦い顔をする敬一郎。
はじめとレオは、昨日と聞いて桃子を見る。
だが、桃子も心当たりがなく、困った顔をするしかない。
「昨日は、ぬ～べ～先生から話を聞いた後、さつきさん日直だから教室に戻られたことまでは知っているのですけど。」
ちらりと、桃子がはじめ達を見る。
「？」
「はじめさんたちが特訓をしているのを見ていただけです。」
「桃子さん！さつきには、内緒にしてください。」
はじめは、さつきに気付かれていないのか、ちらりとさつきを見

て、小声で桃子に頼んだ。
桃子は、にこりと笑って頷いた。
「しかし、それでは原因が分かりませんね。日直で教室にいたなら、こっそりクラスメイトに聞くしか手がかりがありませんね。」
「ん？でも昨日の日直はさっさと帰っていたぞ。俺たちより早く飛び出して行ったし。」
「残る予定の人も居ませんでした。聞いても無駄かもしれませんね。」
ひたすら無言で考え続けるさつきを見る四人。
とりあえず、クラスメイトに昨日の放課後について聞くことにして、学校に向かうことにした。

「さあて、さつきはどっちを選ぶかな。俺としては、毎回毎回右往左往しているのを見るのも面白いんだがな。あいつらに教えるとこっちまで被害が来そうだし、教えるわけにもいかないか。」
その五人の様子を見ていた天邪鬼はため息をついた。
「ちっ、あいつのせいで。人間なんか知ったことか。」
旧校舎の連中が心配していることを思い出した天邪鬼は、旧校舎に行くためにはじめ達を追った。

さっきの悩み（後書き）

次は、お宅訪問。

一日時間が飛びます。

三者面談（前書き）

ぬ～べ～が宮ノ下家にお邪魔します。

三者面談

「ようこそいらっしゃいました、鵺野先生。」

「お邪魔します。」

土曜日の午後、ぬ～べ～は宮ノ下家にお邪魔していた。
さつきに言った日の夜に宮ノ下家に電話して、土曜日に会う事を約束していた。
そのため、さつきの父礼一郎も外に出掛けずにぬ～べ～を待っていたのである。

リビングに案内されてテーブルについたぬ～べ～は、さつきと敬一郎が居ないことに気が付いた。

「あの、さつきさんと敬一郎君は？」

「ああ、さつきと敬一郎ですか？」

礼一郎はコーヒーカップを探してながら、答えた。

「あまり他の人に聞かせたくないとおっしゃっていましたから、敬一郎は外に出しました。さつきは、部屋で待ってます。」

家事はほとんどさつきがやっているのだろう。
コーヒーカップをやっとこそ見つめた礼一郎は、コーヒーを注いで持ってきた。

「インスタントですみません。さつきならきちんと入れれるんですが。」

「いえ、こっちも押しかけて来たような感じですから。」

照れ隠しの笑みを浮かべながら言う礼一郎に、笑顔でコーヒーを受け取って一口飲むぬ～べ～。

礼一郎もテーブルの反対側に座ってコーヒーを飲む。

静かな広いリビングで静かに男二人がコーヒーを飲むという変な構図が出来上がった。

「で、さつきの話を聞かせてもらえますか。この二日ほど様子がおかしいのもそのせいでしょうか？」

「はい。まず、私の紹介からさせてもらいます。」

ぬ～べ～は、左手の手袋を取った。

そして、よく見えるようにテーブルの上に手を伸ばした。

「そ、それは？」

「私は地獄先生ぬ～べ～。左手に鬼を持つ者です。」

ぬ～べ～の左手には鬼が宿っている。

元々は、教え子の一人に憑りついた鬼だったのである。

ぬ～べ～をその鬼を退治しようとしたが、強力過ぎて左手に封印したのが始まりだった。

そして、自分の力が及ばない時などに封印を一部解除して、鬼の力を使って妖怪退治から霊の説得まで幅広く解決してきたのである。

去年封印していた鬼、覇鬼の封印が解けたが和解して、今では左手に好んで居る。
ただ、見た目が少々グロテスクであるため、普段は黒い手袋をはめているのである。

一通り説明をしたぬ～べ～は、一口コーヒーを口に含んだ。

「それでさつきさんの話ですが、さつきさん本人の前に神山家の説明から言わせてもらいます。」

「神山家？妻の実家に何の関係が？」

礼一郎は、本当に何も知らないようであった。
ぬ～べ～は、神山家が代々この土地の鎮守を行ってきたこと、霊脈の事、学校の事も話した。
その間の礼一郎の顔は真剣なもので、信じる信じないというよりどこか納得しているように感じた。

「そうですか。どうりで妻が時々ですが不思議な行動をやっていたのか納得できました。どこか聞いて欲しくない感じがしていたので、聞いたことはありませんでしたが、そんなことをやっていたとは。」

納得すると同時に悲しいのか、ほんの僅か顔に苦いものが入っている礼一郎に、ぬ～べ～は、このことを話してよかったのか迷った。
だが止めるわけにはいかないと、頭を切り替えた。

「それで、さつきさんの事ですが。」

そう言ったとたん、下を向いていた顔がバッとぬ～べ～を直視した。

「簡単に説明しましょう。さつきさんは、霊脈と親しい個人の霊力を操作する才能と、吸収して貯めていく体質と妖怪に好かれやすい体質の二つの体質があります。」

「はあ。」

状況に上手くついていけないのか、生返事を返す礼一郎。

「そして問題なのが、この土地に妖怪や霊が集まりやすく、さつきさんのお母さんが封印していた妖怪達の封印が解かれつつあることです。つまり、さつきさんを中心として天ノ川小学校が危ないのです。」

ごくりと、礼一郎が息を飲んだ。

ぬ～べ～は、話の本題を話し出す。

「そこで、身を守るためにも私の指導を受けて欲しいとさつきさんに提案しました。大切な娘さんに指導を行うことを父親である貴方に話すべきだと思って話しました。当事者であるさつきさんはもちろんのこと、父親である貴方に反対された場合、無理に教えるつもりはありません。私はそもそも、この土地の妖怪達が悪さをしている場合、治めるためにここに来ました。霊眠が解けつつある今、出てくる妖怪は私が抑えます。心配されることはありません。」

話が終わったぬ～べ～は、礼一郎の返事を待った。

今日まで話し方を考えていたが、緊張のあまり順序が変だったなと内心反省しつつ、沈黙を続ける礼一郎の反応が怖かった。

「・・・あなたは、元から霊が見えたのですか？」

「え、ええ。子供の頃から霊が見えてました。」

「嫌だったことは？」

「嫌でした。小学生の時は苛められました。でも、先生の一人が励ましてくれたんです。この霊能力を使って人の役に立てるなら、それは才能だと。私は、この道を歩んで来たことを後悔なんてしてません。」

礼一郎は言葉よりぬ～べ～の表情を見ていたが、フッと微かに笑った。

「良い先生を持ちましたね。」

「はい。」

「さつきが教えて欲しいと言ったら教えていただけますか。貴方は信用に足る人物のようだ。さつきのこと、よろしく頼みます。」

そして、深々と頭を下げた。

「いえ。分かりました。」

慌てたのはぬ～べ～の方だった。

ここまで信用されることも簡単にお願いされることも、深々と頭を下げられるとも思っていなかったのだ。

碌な返事も返せなかったのも仕方ないことだろう。

「では、さつきを呼んできましょう。」

礼一郎が立ち上がるのと、リビングの扉が開いてさつきが入って来るのと同時であった。

「鵺野先生、決めました。私に教えてください。」

ほぼ直角まで頭を下げるさつきを呆けて見ていたぬ～べ～だったが、優しい笑みを浮かべた。

「ああ。こちらこそ精一杯教える。」

それから、ぬ～べ～と二人は少々談笑していたが、敬一郎が帰って来る前にお暇することにした。

二人に見送られて通りを曲がったぬ～べ～だったが、困った顔で頭をかいた。

「あの空気で、隣の隣が家でしたなんて言えなかった。ここまで来たが、どうしたもんか。」

結局、ぬ～べ～は十数分程そこで立ち尽くして家に戻った。

三者面談（後書き）

ぬ～べ～は、宮ノ下家だけは引っ越しの挨拶に行けませんでした。先ほど案内したばかりの家でしたから、行き難かっただけですが。

ちなみに、青山家には挨拶していますよ。

宮ノ下家やはじめは、誰か引っ越して来たのは知ってますが、ぬ～べ～だと気付いていません。

運動会を垣間見た（前書き）

運動会の一シーン。

ダットは次回。

運動会を垣間見た

日曜日、運動会の日である。
結局、中止の話も流れて開催となったのだが、そんな中、気合が入っている少年達がいた。

「うおっしゃー！やるぞ。レオ、敬一郎。」

「分かってますよ。僕だって練習したんです。絶対優勝してやります。」

「うん、頑張って一等を取る！」

「頑張ってください。」

彼らは土曜も午前中から走る練習をして、今日のために特訓していたのである。
自然と気合が入るのも当たり前であった。
ちなみに、皆白い帽子を被っている。
天ノ川小学校では、紅白に分かれて勝負を行うことになっている。
その目印として、紅白帽子を自分の色にして被っているのである。

『次は、４・５・６年生による旗取りです。』

「よし、行くぞレオ！」

「はい！」

帽子を被り直して気合を入れて出ていくはじめとレオ。

さつきは別の競技に出る予定であり、この競技には出ない。

これは、グランド中央に立つ旗21本をどれだけ自陣に持ち帰ることができるかという勝負である。

旗には数字が書かれており、それに応じて点数が入って、多い方が勝利となる。

足の速さとどの旗を取るかが勝負の分かれ目となる。

パンッ

開始の音が鳴り、一斉に駆け出す。

はじめはレオと好スタートを切り、自陣の先頭に躍り出る。

はじめ達の作戦は、数字が大きい旗2本を足の速いチームAが確保。

1が書かれた旗3本は、捨て置く。

チームBが5本を抜いた旗に行って、敵と交戦。

運べると判断すると、一人を残して他の加勢に回るというものである。

はじめとレオは同じチームAだったが、たった二人で一本取る予定になっていた。

「おおお！」

はじめが旗に一足早く辿り着いた。

レオがすぐ後から来ており、敵チーム二人がこちらに来るのが見えていた。

「レオ！」

「任せてください！」

旗を走り抜いて、驚く敵二人に体でぶつかった。
その間に、レオが旗を持って自陣に向かい始める。
揉み合って倒れる三人。
自分からぶつかったはじめは、二人より早く起き上がって周りを見回す。
レオは、見事旗を自陣に持ち帰る途中であり、他のチームＡも辿りつくのは敵と同時だったが、はじめとレオを除いたチームＡは五人。
敵は三人だったため、あっという間に旗を奪い取っていた。
他の場所は、１点３本は敵に持っていかれており、他の旗は一進一退の激戦になっていた。
はじめは、ちかくの優勢になっている旗の加勢に向かった。

勝負は、２勝１敗ではじめ達の勝利に終わった。
はじめとレオは、最初の作戦で点数が高い旗を勝負とも持って帰り、勝利に大きく貢献した。

『次は、女子４・５・６年によるボール投げです。』

「うう、桃子ちゃん変わってよ。」

さつきは、大きな籠を背負っていた。
隣に立つ桃子は、にこにこ笑うだけで何も言わない。

ボール入れは、各チーム五名ずついる籠持ちの籠にどれだけボー

ルを入れれるかという勝負である。
さつきはその籠持ちに選ばれていた。
今回は、一名だけ籠守と呼ばれる者がおり、籠を守ることができる。
そのため、一番遅いさつきの護衛に桃子が選ばれた。

パンッ
開始の音と同時に皆が動き始めた。
さつきは、そんな中じっと動かなかった。
その眼はじっと敵の動きを見ており、敵がどのように動いているかを観察していた。
もちろん、そんな籠持ちを見逃すはずもなく、十数名がさつきに向かって動き出す。
さつきは向かって来る敵を把握し、網が薄い所に走り始めた。

すれ違いざまにボールを入れようとする者は、桃子が防ぎ。
後ろから入れようとすると、手ではじく。
さつきも走りながら、冷静に周りを見て混乱している場所に自分から突撃して行った。
混乱の中では、自分への被弾が減る。
そう信じて、さつきは走り続けた。

「う〜。」

「仕方ありませんよ。さつきさんは2番目に入れられていませんでしたし、頑張りました。」

結局、さつき達白組は僅差で負けた。

さつきは、五人の内2番目に入れられておらず、頑張ったといっていい。
今はお昼休み、五人は一緒に弁当を食べていた。
少し離れた向こうでは、五人の保護者が談笑していた。
「そうだぞさつき。さっさと食べないと全部食べるぞ。」
「そういえば、午後一番ですよね。敬一郎君頑張ってください。」
午後一番の競技は、小学二年生による徒競走である。
「そうね。敬一郎、一等取るのよ！」
「いや、お前ドベだったじゃん。」
「うっ。」
午前の五年生による徒競走では、さつきはドベだった。
「お姉ちゃん。僕、頑張るから。」
握り拳を作ってさつきに意気込みを見せる敬一郎に、さつきはジーンときた。
「よく言った敬一郎。お父さんも応援してるからな。全力で走って来い！」
向こうで談笑していたはずの礼一郎が、いつの間にかさつき達の脇に立っていた。

「おお！頑張れよ。」

「応援してるわよ。」

はじめ達の保護者も向こうから声援を送ってきた。

「それにさつきもリレーに出るからな。頑張れ！」

「よく言った礼一郎、こっち来て飲め！」

「コーラ追加！」

『・・・』

保護者達の方が何か盛り上がっていた。

いつの間にか少しお酒が入っており、ほろ酔いしている保護者達は、他の保護者達も混ぜながらより一層盛り上がり始めた。

「うん、頑張る。」

どこか空虚な瞳でぼそりと敬一郎が呟いた。

運動会を垣間見た（後書き）

学校の怪談を見直して敬一郎が小1だと気付いた。

けど、この話では小2で行きます。

ダット

『これより午後の部を始めます。』
アナウンスとともに、昼休みが終わった。
生徒たちは、それぞれのクラスのテントに向かい、午後一番の競技と二番目の生徒達は、入場門に向かった。

敬一郎は、午後一番の競技が小学2年生の徒競走であるため入場門にいた。
そしてふと、視線を脇に向けると、白い鉢巻に白い体操服を来た少年がいるのが見えた。
少年の視線は、じっとグランドの方に向いている。
白い少年は、敬一郎が学校のグランドで走っていた木曜と金曜に現れた少年だった。

『走りたくても走れなかったんだ。』

少年が最後に会った時に敬一郎に言った話が思い浮かんだ。
努力したが、事故に遭って走れなかった少年の話。
それを聞いた敬一郎は、その少年のためにも走ろうと決意した。

「頑張る。そして、一等を取るんだ。」

鉢巻を一度緩め、少し強く締め直した。
ふうと息を吐く。

『第四レース。一コース朝倉くん。第二・・・』
アナウンスが自分達第四レースの名前を順に読んでいくが、その声も聞こえなくなる程集中していく。

目的は、ただ一つ。
全力で、走りきる！！
自分のフォームを思い出す。

パァン

ピストルが鳴った瞬間、敬一郎は一歩を踏み出した。
緩やかにインコースに入り、最初の直線の中頃まで到達する。
敬一郎の前には誰も居らず、トップを走っているが、自分のフォームが崩れている。
思い出そうとするが、この数日での出来事が無かったかのように思い出せなかった。

「○×△□。」

すぐ後ろまで追いついて来た誰かが敬一郎に何か言うのが聞こえた。
しかし、敬一郎はそんなことに気を留める余裕がない。
どうしようと、弱気が敬一郎を襲い、走る速度が落ちるのを感じた。

「っ！」

白い影がさっと敬一郎を抜いた。
一瞬敵かと思ったが、例の白い少年だった。
少年は、美しいフォームを敬一郎に見せるかのように敬一郎の右前で走る。
コースは、カーブに差し掛かっている。
敬一郎は少年のフォームを見て、自分のフォームを直した。
自然と少年と敬一郎の速度が上がる。

驚いたのは、見ていたさつき達である。
ぬ～べ～とさつきは、白い少年が霊だと感じて、敬一郎が危ないかもしれないと霊の見極め始めた。
はじめとレオは、少年が徒競走に乱入したことに驚き半分、敬一郎の速度が上がったことに嬉しさ半分だった。
だがそれも始めだけで、少年の存在に誰も気付かないことが分かると、妖怪じゃないかと不安になり始めた。
桃子は、少年が霊だったことに少々驚いたが、良い霊だろうとにこにこ見ていた。

そして、少年が見えていた者は、スタートラインから高速で選手たちに迫る死神が持つような鎌が見えた。
遠くにいたさつきとぬ～べ～は間に合わず、はじめとレオは妖怪の正体がダットだと気付いて焦り、桃子はあまりのことに目を丸くしただけだった。
その間に鎌は選手たちを抜いて、敬一郎に迫り始めた。

「おかしいですよ！ダットは確か４：４４にしか鎌で人の足を切らないはずです。」

「でも出てんじゃねえか！今はまだ一時・・・」

「旧校舎を見てみな。」

はじめとレオは、突然話に割り込んで来た天邪鬼を気にすることなく、旧校舎を振り返った。

「よ、４時４４分。」

「そんな、旧校舎の時計だなんて。」

「逃げろ、敬一郎！」

焦るさつき達をおいて、当の敬一郎は嬉しさでいっぱいだった。
コーナーを曲がり切った敬一郎は、木曜日と金曜日みたいに突然消えるかもしれないと思った。
毎回、白い少年は、敬一郎が走るを終わる前にどこかに消えてしまっていた。
言えなかった言葉を消える前に伝えたい。
敬一郎は、最後の直線に入ると口を開いた。

「僕ね。最初はちっとも速くなれるとは思っていなかったんだ。はじめ兄ちゃん達が励ますからとりあえず走ってみようって。でも、お兄ちゃんが手伝ってくれたから、もしかしたら一等も取れるかもって思ってたんだけど、お兄ちゃんの友達のためにも一等になるって決めたんだ。」

「・・・」

「お兄ちゃん、ありがとう。お兄ちゃんのおかげで一等取れるよ。」

敬一郎は、無表情だった白い少年がわずかに微笑んだのを見た。
敬一郎も笑おうとしたが、笑う前に視界から消えてしまった。

一方、鎌を見ていた者は、敬一郎と走っていた白い少年が迫る鎌を受け止めて、一緒に空に昇っていき、スウッと消えるのが見えた。

運動会はそのまま何事もなく終わった。

ダット（後書き）

ダットと敬一郎の関係は、変えませんでした。

さつき達が霊眠させることもぬ～べ～が関わることもしたくなかったので、こうしました。

ぬ～べ～の秘策

最近、奇妙な噂が流れていた。
一人で留守番していた子供に妖怪が襲って来るというものだ。
実際、何人かの子供達がショックを受けて寝込んでいる。
その日、さつき達5人は、それぞれ保護者が出かける予定があるらしい。

「レオ、敬一郎、俺んちでゲームしないか？」

「桃子姉ちゃん、今日泊りに来て？」

「いいですよ。久しぶりにはじめの家に泊まるのもいいですしね。」

「さつきさん。良かったら、お邪魔してもよろしいですか？」

「うん。今日の夕食、一緒に作らない？」

皆噂を知っているため、誰ともなく一緒にお泊りすることになった。
しかも何も決まっていなかったのに、さつきとはじめ以外はお泊りの準備をして持って来ていたらしい。

「あ。でも桃子ちゃん、敬一郎と先に帰っていてくれる？」

「分かりました。」

「何かあんのか？」

「うん。今日はちょっと用事があって少し帰るのが遅れるの。」
「さつき、時々用事があるって言ってるけど、何してんの？」
「え？ええっと、授業で分からないこととか、不思議に思ったことを先生に聞いているだけよ。」
ちょっと言葉を濁しながら、さつきは桃子に敬一郎をお願いねと頼む。
さつきは、嘘ついてごめんと内心謝りながら、これはちょっと教えられないと思っていた。
奇妙な噂が流れ始めた頃、ぬ～べ～は霊の仕業かもしれないと、子供の家に足を一度だけ運んでいた。
その時に妖怪がいた残滓を見つけていたのである。
そこで、ぬ～べ～が残滓から妖怪の拠点の特定を行い、さつきが復帰した子供達から情報を集めることになったのである。
今日の放課後、それぞれの情報を交換する約束をしていたため、皆と帰れないというわけであった。

そして、放課後。
はじめ達と別れたさつきは宿直室にいた。
学校に泊まり込む必要はもうないが、泊まり込む先生のために宿直室が用意してある。
普段出入りがないこの部屋で、ぬ～べ～からの指導を受けていた。
既にぬ～べ～もおり、それぞれの情報を交換した二人は唸った。

「一人で留守番していると現れる鎌を持った妖怪か。」

「霊眠していた神社が拠点だなんて。」

妖怪の正体はババサレ。

一人で留守番している子供の家に訪れて、襲ってくる妖怪。

ローブを被った痩せている老婆の恰好をしており、手には鎌を持っている。

ときたまその鎌で子供を切ることもあり、実際子供達数名が鋭い刃物で切られていた。

さつきの母が神社に霊眠したが、裏山の開発で神社も破壊されたために霊眠が解けたらしい。

「かなり厄介だな。」

「ぬ～べ～の鬼の手なら大丈夫なんじゃないの？」

「確かに遭遇したら鬼の手で攻撃できるがな。会うまでが大変なんだ。」

アッとさつきが声を上げる。

「そう、俺は大人だからな。向こうから逃げていく。神社に行った時も、さっきまでいた感じがしたから、おそらく大人に会えない妖怪なのだろう。」

うう。とさつきが項垂れる。

宿直室には、夕日が差し込み始めていた。

さつきは、ぬ～べ～に今日子供だけで泊まり込むことを伝えた。

ぬ～べ～は、ババサレが二人の子供前にも現れたことがあったた

め、危険だと感じた。

「俺が行けばお前らの前に現れないが、それでは解決にならん・・・いや、あるな。」

ぬ～べ～がにっこりと笑みを浮かべてさつきを見た。

「ババサレが来た家は停電するらしい。だから、さつきにはこれを渡しておく。」

ぬ～べ～がさつきに渡したのはトランシーバーと電話番号が書かれた紙であった。

はあ、と生返事しながら受け取ったさつきだったが、トランシーバーと電話番号を見て驚いた。

「ぬ～べ～。これでどうしろって言うのよ！」

「こちらの策が失敗した時の保険だ。そちらに現れた時にそれを使って呼んでくれ。五分以内に駆けつける。」

「策？」

「それは・・・」

その日、放課後いっぱいまでさつきは学校に残っていた。

ぬ～べ～の秘策（後書き）

次にとある人物が出てくると思います。

分かる人もいるかも。

知らない少年

さつきが帰った時、ちょうど桃子が夕食の準備を始めた頃であった。

「ごめん、桃子ちゃん。私も手伝う。」

「あ、さつきさんお帰りなさい。」

さつきは、急いで鞄をリビングの入口に置き、手を洗って台所に入った。

桃子は玉葱を刻み終え、人参とジャガイモの皮抜きをしていた。

「じゃあ、玉葱を炒めるね。」

さつきは、フライパンに油を敷いて、玉葱を炒め始めた。

そういえば、とさつきは炒めながら桃子に聞いた。

「レオ君もはじめの家にいるの？」

「ええ、何か情報を集めようとしていたらしいですが、はじめさんの新しいゲームがパーティ制らしいので、人数が欲しいって無理やり連れて行きました。」

「そう、なんだ。」

安堵するように息を吐いた。

さつきは、左手の手首に念珠があるのを確認した。

ババサレに襲われる可能性が高いのは、三人の向こうより二人の

こっちである。
だから、レオが向こうにいるのか確認したのである。
でも、とさつきは考えを続ける。
桃子ちゃんが今度は危ない、どうにかして向こうにやった方がいいよね。

考えながら夕食を作っていると、ガチャガチャと鍵が開く音が聞こえてきた。

「おっ、今日はカレーか。」

合鍵を持っている敬一郎かと思っていると、堂々と入って来たのははじめだった。
どうやら、敬一郎から合鍵を借りてきたらしい。

「何人の家に勝手に入って来てるのよ！」

「ん～、おいしそうじゃん。では、一口・・・」

鍋の前まで来たはじめは、お玉を取ってカレーを口に・・・

「させるか！」

さつきの拳骨がはじめの上に落ちた。
痛くてお玉を落としたはじめは、キッとさつきを睨みつけた。

「少しぐらいいいじゃねえか。まあ、いいや。俺は晩御飯を取りに来ただけだし。」

ブチッと桃子は何かが切れる音を聞いた。
それと同時に、何かの波動がさつきからあふれてくる。
その気迫にはじめは一歩後ずさる。
「あ・ん・た・ねえ。いい加減にしなさいよ！」
さつきの怒号を合図に両者が動き始めようとした時だった。
ピンポーン
玄関のチャイムが鳴った。
何かと顔を見合わせる三人。
「レオ君かな？」
「でも、飯持ってくるって言って来たんだぞ。」
「出てみてはどうですか？」
桃子の言葉にそれもそうかと、さつきは玄関に向かった。
それをリビングから顔だけ出して見守る二人。
「はい、どなたですか？」
「俺だけど。」
「俺？レオじゃないのか。」
「誰なんでしょう？」

「待ってたよ。」

誰かと不思議に思う二人に対して、さつきは先ほどまで激怒していたことが嘘のように笑顔になった。

ガチャ

さつきが開けた扉の先には、さつきより少し背が高い利発そうな少年がいた。

手には何かの小箱を持っており、腰にポーチをつけている。

「いらっしゃい。どうぞ、入って。」

「こんばんは、二度目かな。お邪魔します。」

笑顔で迎え入れられた少年は、二人に気付いた。

さつきも気付いて、少年を手で示して言った。

「こちら、6年生の陽神明くん。明くん、こっちは桃子ちゃんにはじめ。」

「どうぞ、よろしく。」

にこっと陽神明は笑った。

知らない少年（後書き）

とうとう登場した陽神明。

ちなみに知らない人に言っておきますが、ひのかみあきらと読みます。

詳しい素性は後々。

それでも知りたい人は、地獄先生ぬ～べ～の漫画かアニメ、ウィキでも見てください。

陽神明とさつき（前書き）

陽神明の正体は分かったでしょうか。

今回も正体は明かさずに、進みます。

陽神明とさつき

蒼天の霹靂だった。
それもそうだろう。
ここに引っ越してから、ここに転校してから、さつきと一緒に行動することが多かった。
そのさつきから、知らない少年を紹介されたのだから。
しかも、少年とさつきは、大分仲が良さそうである。

「じゃあ、明くん。こっちに荷物置いて。」

「ありがとう。」

向こうで明に家を軽く紹介していたさつきが、リビングに戻って来た。

「あ、はじめ。カレー注ぐから向こうに持って行って。」

「あ、ああ。」

「桃子ちゃんも3皿とサラダがあるから、手伝いに行ってそのまま向こう遊んでいていいわよ。私は、明くんのために寝室用意しないといけないから。」

矢継ぎ早に言われて、混乱する二人を余所にさつきが畳み掛ける。

「お手伝いなら、私も・・・」

「さつきさん、布団はこっちの部屋からでいいんですよね。」

「うん。」

何か二人で十分のようであった。

置いて行かれた感じの桃子とはじめは、カレーとサラダを持って急いで青山家に向かった。

はじめの家では、敬一郎とレオがパーティを組んでモンスターを倒すゲームをしていた。

「レオ兄ちゃん、そこ。」

「うわっ、と危ない。やはりはじめが居ないときついですね。ｃｐｕだと砲台にしかなりませんし。」

バンッ

「レオ、敬一郎！」

はじめが走り込んで来た。

後ろから桃子も急ぎ足で入ってきており、急いでゲームをしに戻ってきたわけではないらしい。

はじめと桃子は、持っていたお盆を、乱暴にテーブルに置いて駆け寄って来た。

「どうしんですか？」

「行くぞ！急げ。」

「どうしたの？」

「レオさん敬一郎くん、急ぎましょう。」

桃子の言葉に二人ともとりあえず動くことにした。
四人で青山家を出て、玄関ではなく庭に入った。
庭からリビングが見えるはずである。
はじめと桃子は、二人の様子がとにかく気になっていた。

「それで、どうしたんですか？」

レオが窓から中を覗き込んでいるはじめに聞いた。

「あのですね・・・」

桃子がざっと状況を説明する。

「なるほど、あのさつきさんに彼氏がいるなんて。」

「いえ、彼氏かどうかは・・・」

「敬一郎は何か知っているか？」

「う～ん。」

敬一郎は、記憶を呼び起こし始める。

「あ、東京で時々男の子が来てたよ。」

「もしかして、追いかけて来たのかも。」

「運命の再会ですね。」

「んなばかな。他にないのか敬一郎。」

はじめに問い直されて、う～んと再び考える。

「あ、運動会の前の日、お姉ちゃんの機嫌良かったよ。お父さんもお姉ちゃんを見て微笑んでた。」

『親、公認！？』「・・・」

驚愕する桃子とレオ。

釈然としていないはじめ。

『明、食事の準備できたよ。』

窓の中からさつきの声が聞こえてきた。

慌てて窓から覗き込んで、聞き耳を立てる二人。

『さつき、部屋の片づけも終わったよ。』

『流石一人暮らししてるだけはあるわね。』

和気藹々とした様子で、食卓を囲む二人が見えた。

「さつき、だって、あっちが言うと夫婦みたいに見えますね。」

「うん。なんかドラマみたい。」

「仲良さそうですね。」

「・・・」

四者四様の反応をしながら、二人を見守る四人。
さつきと明は、食事をしながら会話を続けていた。

『でも明がこっちに来たってことは、あっちはもう。』

『うん終わった。肝心なのはまだだけどね。こっちに来ると思う。』

『じゃあ、今夜はこっちは二人でいた方がいいよね。』

『敬一郎君と桃子ちゃんは大丈夫なのか？』

『敬一郎ははじめの家に泊めれるけど、桃子ちゃんはどうしよう。』

「何する気なのでしょうか、あの二人は。」

「そういえば、私達の前では明くんと呼んでいたのに明になってます。」

「僕ははじめ兄ちゃんの家に泊まってもいいよ。」

「というか、桃子さんあんな奴六年にいました？」

盛り上がる見守り組は、はじめの疑問に頭を傾げた。

「あんな人がいたら知っていると思いますけど、知りませんね。」

「私も知りませんわ。女子の話にも出てきていませんし、おかしいですね。」

「何者なんだ？」

明の正体に疑問を抱き始める三人。

敬一郎は、話についていけずに頭の上に？マークが浮かんでいる。

そんな四人を余所に、中の二人の会話は続いていた。

『何を持って来たの？』

『ん？ヨーヨーと符とトランプ。』

『やれるの？不良品とかないよね。』

『ヨーヨーは何回も使ってるし、符はもちろん、トランプは使ったことのない新品だ。』

『なら大丈夫かな。』

『しかし、さつきの料理は美味いな。一人暮らしでも料理だけは上手くならなくてね。』

『教えてあげる。ずっとインスタントとか体に悪いし。』

何か良い雰囲気になっている。

見ている四人は何かむず痒くなっていた。

我慢できずに中に入りそうになった瞬間、フッと電気が消えた。

『来たか。』

『うん。』

「どうしたんでしょう？」

「さあ？」

対比的な二組だが、外の玄関で赤い光が灯された。

そして・・・

陽神明とさつき（後書き）

いよいよ次はババサレの登場です。

危険妖怪Ｂ（自己評価）のババサレは、霊眠か消滅対象です。

逃げるのも逃げさせもしません。

ババサレ

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴った。
明は、さつきに符を渡した。

「これの使い方は知っているね。」

「うん。」

「じゃあ、出てくる。」

明は、玄関に向かう。

「はい、どなたですか？」

ドンドンドン

明の問いに答えることなく、扉が激しく叩かれる。
普通の子なら不気味だけで済むが、明の目には禍々しい霊気が見えている。
確実にババサレである。
明は、ヨーヨーを準備しながら玄関の鍵を開けた。

バンッ

勢いよく扉が開けられた。
明は鍵を開けて、リビングに逃げ込んでいた。

ババサレは、その後姿を見てリビングに滑るように追いかけて来る。

「今だ！」

「我が意思に答えよ。」

明の合図で、さつきがババサレを囲むように配置した符を発動させる。

ババサレは出ようともがくが、青白い火花を起こすだけで結界から出られない。

ここで、やっとババサレの全容がはっきりした。

黒いローブを被り、やせ細った様な老婆の顔。

片手には草刈鎌を持っており、聞き込みの通りの姿である。

ただ、変なのは、鎌を使って結界を切ろうとしないことであった。

「まあ、何にせよチャンスだ。」

明はそう言って、トランプを出した。

トランプを数枚ババサレに向かって飛ばす。

トランプは、結界をすり抜けてババサレに突き刺さった。

ギッと叫びを上げたババサレは、トランプが通過した部分を鎌で切り裂いた。

「なっ！」

「ちょっと、どうすんの？」

結界があっさり切り裂かれた事に二人が動揺している隙に、ババサレは結界から完全に出て来た。
鎌と体を揺らして、赤い目が二人を見つめる。
心なしか怒っているように見えた。

「こんのっ！」

明のヨーヨーがババサレにめり込んで、壁までリビングから吹き飛ばした。
追撃とばかりに明はトランプを数枚投げつける。
明の目には、霊気が減っていくのが見える。
さらに数枚投げつけた。

「・・・さつき、これで霊眠を。」

明が取り出したのは、ビー玉大の黒い球だった。
受け取ったさつきは、球をじっと見つめていたが、顔を赤らめた。

「黒真珠とかじゃないから。黒曜石だから。」

「えー。ダイヤとかがいいのに。」

売る気か？と呆れた目で見る明。
えへへと下を出して笑うさつき。
二人が変なコントをしている間に、ババサレが立ち上がっていた。

「さつきやれ！」

明が再びトランプを投げる。
だが、何回も受けるババサレでもなく鎌で数枚落とす。

しかし、明の狙いはそれではなかった。
外したはずのトランプが、ババサレを囲んでいた。
「簡易結界だよ。」
「ババサレよ。霊眠せよ！」
さつきが黒曜石を掲げて唱えた。
カッと黒曜石から光が出て、ババサレを包んだ。
そして、白い光が視界を埋め尽くす。
「・・・やったの？」
光が収まるとババサレの姿はなく、いつも通りのリビングと廊下が目の前に広がっていた。
ただ、トランプや符がババサレとの戦いを示しているだけだった。
「うん。ちゃんと霊眠できてる。」
明がさつきに近づいて、さつきが手に持っている黒曜石を覗き込むように見ながら言った。
さつきは、こんなに小さい黒曜石に本当に入っているのか確認する。
はじめ達は、いきなり停電したことで混乱していた。
「はじめの家は、停電してないようですね。」

「ブレイカーが落ちたのでしょうか？」
「おい、中の二人は？」
「暗くて見えないよ、はじめ兄ちゃん。」
『ババサレが来たのさ。』
いつの間にか足元に黒猫がいた。
「天邪鬼！？」
「どうしてここに？」
「カーヤ！」
騒ぎ立てるはじめ達を、天邪鬼はいらつくような感じで遮る。
『落ち着けガキ共。早くしねえと、さつきが危ないぜ。ババサレは相手が気絶しない場合、切りかかることがあるからな。』
はじめは、天邪鬼の言葉に玄関向けて走り出した。
「あ、はじめ！」
レオ達もはじめの後を追う。
ドンドンドンと激しく扉を叩く音が響いたかと思うと、バンと扉が開く音も聞こえた。
「なんだってんだ！」

「はじめ、もしかするとババサレではないですか？」
家の正面に回るとババサレの姿はなく、開けっ放しの扉があった。
はじめ達は、急いで玄関に駆け寄る。
カッ
「うわっ！」
家の中から激しい光がはじめの目を眩ませた。
後ろから来たレオ達も、玄関から中の様子を見ることができなかった。
しばらくすると光が止んだ。
はじめ達は、恐る恐る中に入った。
『あっ。』
『こりゃあ、驚いたな。』
リビングで明という少年とさつきがくっついているのが見えた。
さつきと明は、はじめ達の声で慌てて離れた。
「な、なんで皆いるの？」
「どうかしたのか？」
慌てるさつきに何事もなかったかのような明。

「どうかしたのかって。」

「あ、ババサレはどうしたんですか？」

話を逸らしたいのか、ただ興味があるだけなのか、レオが話をそらす。

「あ～。さつきが霊眠したよ。」

明が敬一郎の前に来て、しゃがんで目線を合わせた。

「君が敬一郎君だね。俺は6年の陽神明。さつきさんにはお世話になってるよ。よろしく。」

「うん、明お兄ちゃん。」

どこか変な空気の中、明と敬一郎が仲良くなっていた。

ババサレ（後書き）

ババサレ退場。

戦闘シーンって意外と難しいですね。

あっという間に霊眠してしまった。

おかしい、もう少し苦戦する予定だったのに。

戦い終わって、さつきは眠る。（前書き）

今回は閑話的なもの。

次回からはうつしみに移ります。

戦い終わって、さつきは眠る。

場の混乱は、旅行を途中で止めたさつきの父である礼一郎が帰って来るまで続いた。
礼一郎が帰ると、食事をしていなかったはじめ達も一緒に夕食を食べた。
その間に、明とさつきは食事をしているはじめ達に聞こえないよう部屋で話していた。

「この霊眠したのはどうするの？」

「ああ、それは知り合いの住職に預かってもらうか、そのままさつきが持っておくかだ。捨てるのも旧校舎に置いておくのも危険だからな。」

「はい。あなたから渡しておいて。私が持っているとあいつが・・・」

『あいつってのは俺の事か？』

さつきの机の上に天邪鬼が俯せになっていた。

「そ、そうよ。あんたが悪戯するかもしれないでしょ！」

『ふん。勝手に言ってろ。』

さつきが噛み付くと、天邪鬼はフンッと鼻を鳴らして振り払うかのように尻尾を振った。
明は喧嘩する二人を温かい目で見ていたが、黒曜石を指ではじい

て宙に上げ、キャッチした。

「さつき、良いコントロールだったよ。」

「私も上手くいって良かったです。明くんのおかげですよ。」

さつきは天邪鬼との喧嘩を止めて、笑みを浮かべた。

「カレーを美味かったし、そのうちまた食べさせてくれ。」

明はそういうと、リックをからって部屋を出て行った。

「あ、ちょっと待ってよ。」

「また明日会おう。今日は退散するよ。」

さつきが明を止めるが、明は手を振るだけで止まらずさつきの家から出て行った。

『あいつは、あの教師だよな？』

珍しく自信が無さげな天邪鬼の問いに、さつきはベットに寝転がって話し始めた。

「うん。ぬ～べ～が陽神の術って言ってた。幽体離脱みたいなものだって。」

『ふうん。子供しか襲わないから霊体で、子供になったわけだ。いい度胸してるじゃねえか。』

天邪鬼は気分が良さそうに尻尾を揺らした。
その手元には焼き魚が置いてある。

「まず妖気を辿って、どこに向かっているのか確認した後、陽神の術で子供の姿になった後、こっちに駆け付けてくれたの。」

それで準備が整っていたのかと、天邪鬼は焼き魚に齧り付いた。

『ガキ共からの質問にはどう答えるんだ？』

「それも考えてるわ。でも、もう疲れ、ちゃっ、た。」

スースーとさつきは眠ってしまった。
焼き魚を食べてしまった天邪鬼は、ぐっすり眠っているさつきを見て、にやりと笑みを浮かべた。
そして、ボリボリと魚の骨をかじり始めた。

戦い終わって、さつきは眠る。（後書き）

事後にどうするか。

明とさつきの関係を筆頭に、どう決着つけるか。

始めから、それはなし崩し的に保留にする予定でした。

さつき、ぬ～べ～、はじめ、天邪鬼。そして、明。

この四人？五人？が話の中心になると思います。

うつしみ、早速退場のぬ～べ～（前書き）

うつしみの回になります。

うつしみには、独自設定をつけています。

うつしみ、早速退場のぬ～べ～

「うん、分かったよ。今度の休みには帰るから。ゆきめも体に気を付けろよ。気温の変化が激しいから解けないように。うん、また愛してるよ。」

ガチャと受話器を置いた。

ここは、宮ノ下家の隣。

ぬ～べ～の借家？である。

単身赴任という形でここに来ているぬ～べ～は、毎日家に電話して、ゆきめ達と会話している。

今度、連休を使って帰ることを約束したぬ～べ～は、ベットに倒れ込んだ。

家に帰りたいが、現状であまりここを離れるのは危険である。

さつきの霊力操作が上がり、霊眠できる可能性が上がっているとはいえ、数日間も離れるのには不安がある。

「ここはひとつ、保険を掛けておくか？」

手元にある数枚減ったトランプを弄りながら呟いた。

隣から帰って陽神の術を解いたぬ～べ～は、かなり疲労が溜まっていた。

陽神明が投げていたトランプは、一定の霊力で発動し、それに応じた量の妖力を喰う術が施されている。

数枚のトランプで切り裂かれたババサレは、かなりの妖力をトランプに喰われたために弱っていたのである。

本来は一枚しか投げないのであるが、数枚ずつ数回投げたぬ～べ～は、その分霊力が減ってかなり疲労しているわけである。

ちなみに、ヨーヨーの方は速度に合わせて威力が増す道具である。

霊力で速度を多少上げたり誤差を修正できるのは、トランプも付いている。
色々考え込んでいる間に、いつの間にかぬ～べ～は眠っていた。

一週間後、ぬ～べ～宅。

「ふあ～あ。」

大きな欠伸をするぬ～べ～がいた。
目じりを拭いながら、手に持っている物の感触を確かめる。
手には、黒曜石の球が数個握られていた。

「やっと帰って来れたな。」

今日は、受け持ちの体育の授業が無かったため、ぬ～べ～は知り合いにこの黒曜石の球を取りに行っていたのである。
荷物を置いて、洗濯物を洗濯機に入れてスイッチを入れたぬ～べ～は、部屋に戻ってきた。
ぬ～べ～の部屋にある机の上には、たくさん物が散乱していた。

「う～。眠いな。」

再び欠伸をしたぬ～べ～は、今度は拭わず、机のものを確認し始める。
ぬ～べ～の水晶玉より二回り程小さい水晶玉。
朱色の小さな球で作られている数珠。

黒色の小さな棒。
そして、ぬ～べ～自作の呪符が何十枚もあるのをまとめる。
「これだけあれば、大抵の妖怪にも対応できるだろう。こっちは・・・」
黒曜石を取りに行くついでに寄った寺で貰った品々を入れたリックを見下ろす。
寺の住職でありながら金儲けに目が無く、信用のおけない住職から適当に押し付けられた品々。
最近、似非宗教を取り潰すを手伝ったおかげで幾何か儲けたためか、ただ同然で買ったものではあるが、あそこからの物は偽物が多い。
「一個ずつ見ていくか。」
リックをひっくり返したぬ～べ～は、床に座り込んだ。

「こんばんはー。」
何時間見ていただろうか。
慎重に見ないと、ひょんな所で変な物が出てくる住職からの品であるだけに、一個一個時間を掛けて見ていくうちに、かなりの時間が過ぎていたらしい。
明るい少女の声で、ぬ～べ～は集中を解いて顔を上げた。
「ぬ～べ～。夕食持ってきたよ。」

部屋の扉を開けて顔を出したのは、さつきであった。
手には御盆を持っており、肉じゃがとご飯、漬物が置いてあった。
「ああ、ありがとう。」
腰を上げてさつきからお盆をもらい、ベットに座った。
さつきは、ババサレ事件から毎日晩御飯を持って来てくれていた。
最初に来た時はかなり驚いた。
ぬ～べ～は、自宅を知らないはずのさつきがここを知っていることを問いただしていた。
すると、焼き魚の代わりに天邪鬼から聞きました。などと当たり前かのように言われた時には、誰の性格かと真剣に悩んだものだった。
料理の腕がカップ麺作る程度のぬ～べ～にとって、これほどありがたいことはない。
さつきに断ろうとしたが、嫌でも持ってくる発言をしたため、礼一郎に言うと、教えてもらう授業料代わりにでも食べてください。と言われたため、ありがたく食することにしていた。
「机と床のこれらはなんですか？」
さつきが床と机に広がった物を指差して聞いていた。
目が好奇心できらきら輝いている。
「ああ、机のはお前へのプレゼントだ。ん～。美味い。」
箸で机を差した。
「棒以外は使い方分かるだろう。数珠は経を唱えられないだろうが、

持っているだけで効果がある。」

ぬ～べ～は、うわあと机の物を手に取るさつきを微笑ましく見ながら、パクッとじゃがいもを口に入れる。

「棒の方は、霊剣と半球状の結界が張れる優れものだ。まあ、霊力を喰うからまだ使わない方がいい。」

さつきは、ふうんと適当な返事をしつつも満身の笑みを浮かべて手に持った霊剣を持つ。

だがしばらく見ると、机の上に戻して床の品々を指差した。

「こっちは？」

「そっちは、偽物や呪いの物もあるから慎重に調べていたところだがな。例えばな・・・」

ぬ～べ～は、箸で床の万華鏡を差した。

「それは閉じ込めた者を出さない万華鏡。かなり高位の術者が作った物なのか、幽霊や妖怪を封じると少しずつ浄化していくらしい。今ふぁ、ふぁにもふぁひっへふぁいへほ。」

「途中で食べるの再開しないで。行儀悪いでしょ。」

さつきに怒られるも、全然堪えないぬ～べ～は、その後も時節食べながら解説を続けた。

「結局、寝てねえのな。」

チュンチュンと小鳥が鳴くのを聞きながら、大きな隈を作ったぬ～べ～は半分閉じた目を窓に向けた。

すっかり朝日が昇っているようだ。

昨日、さつきに嬉々として説明していたぬ～べ～は、帰るさつきに明日も教えてと言われたこともあり、寝ずに鑑定していたのである。

ファーと大きな欠伸をして、カレンダーを見て今日の予定を思い出す。

「今日は・・・ああ、運動会のための練習で使った体育の返上で受け持ち無しか。うん、寝よ。」

そのままベットに倒れこんで、寝始めた。

「ん？」

起きたら目の前に鏡が広がっていた。

誰かが両脇を持って、寝ているぬ～べ～を鏡の前まで運んだらしい。

さつき、じゃないか。

ここを知っているのは、礼一郎か？

「っ！」

鏡の中の礼一郎は、不自然な眼鏡を掛けていた。

それにねっとり肌に絡みつくような霊気も感じた。

礼一郎じゃない！？

驚いている隙に、鏡が目の前に押し付けられる。

そして、体をねじって逃れようとするぬ～べ～の体が鏡に押し込まれていく。

鏡の中からも黒い影が伸びてきて、引き込む力が強くなる。

「ちぃ。陽神の術。」

逃れられないと思ったぬ～べ～は、咄嗟にポケットの中身を出すと同時に陽神の術を唱え始める。

しかし、鏡に入る速度が速く、不完全のまま発動した。

「お前ら・・・効くか？」

術を唱えながら、ポケットから落としたトランプを一枚ずつ礼一郎と本物体と入れ替わりに出て来た自分目掛けて投げつけた。

「ギィェ。」

変な声を上げて、二人が消滅した。

「鏡に入れて入れ替わる妖怪か。あれは分身体みたいなものなのか？本体はどこだ？」

投げたトランプを回収して、難しい顔で頭を掻いた。

うつしみ、早速退場のぬ～べ～（後書き）

ぬ～べ～退場、明くん再登場です。

既に事態は進行していて・・・（前書き）

うつしみにも独自設定がついています。

はっきり言って、霊眠って便利ですよね。

既に事態は進行していて・・・

偽ぬ～べ～と偽礼一郎を倒した明は、机の上の道具をポケットに突っ込み、玄関から外を窺う。

「もう日暮れだったのか。」

外はちょうど陽が沈んだ頃で薄暗かった。
姿勢を低くしながら門まで行き、門から外の通りを覗く。
一軒家が立ち並ぶいつもの道だ。
人一人居ないが、ありえないわけではない。

「あれは、妖怪だった。ってことは、さつきの家か？」

隣の家を見ると、電気が付いていない。
職場が原因か？と疑問に思ったが、何かが引っ掛かった。
首を傾げながら、隣の家に向かうことにした。

明の目の前には、不気味な館がそびえ立っていた。
明かり一つ付いておらず、空も怪しげな雲で覆われていた。
ん？と明は頭に引っ掛かったことの一つに思い至った。
敬一郎とさつきである。
下校時刻は過ぎており、学校から帰って来ていてもおかしくない。
礼一郎がこっちに来ていたということは、この家では・・・
ダッと玄関に向けて駆け出す。
扉に鍵は掛けられておらず、簡単に開いた。

「さつき！敬一郎！」

叫びながら中に入る。

人の気配はなく、部屋を一つ一つ調べていく。

しかし、誰も居なかった。

「偽物と本物が入れ替わるのなら、偽物だけでもいるはずだけど。怪しい物も無かったし、原因はここではないのか？」

だんだん嫌な予感が大きくなっていき、霊体であるのに寒さを感じた。

「これが学校から始まっているなら、かなりの広範囲に・・・」

「あれ、鍵開けっ放し。」

ゾッとしない考えが浮かんだ時、玄関から声が聞こえてきた。

慌てて廊下に出ると、玄関に人影があった。

「もう、敬一郎。戸締りはするよう行ってるのに。」

「さ、さつき？」

驚きから擦れた声しか出ない。

人影は、廊下に出た音で気付いたのか、声に気付いたかは分からないが、顔を上げてこっちを見た。

「あれ？なんでぬ～、明がここにいるの？」

「さつき、襲われなかったか？」

「？？？」

言っている意味が分からない様子のさつきに、明はとりあえず一息ついた。

さつきは無事だが、同行していない敬一郎は手遅れの可能性が高い。

明は、荷物を置くさつきの元に近寄ると、靴を履いて玄関から連れ出した。

「な、何？」

「話は行きながらするから、はじめはどうした？」

「はじめ？はじめは先に帰って・・・」

「さつき、どうかしたか？」

家の方から当のはじめが出て来た。

明ははじめを注意深くみるも、いつもと変わりはなかった。

普通の人から見れば、眼鏡を掛けたぐらいしか変わらなくても、霊視ができる明からすれば一目瞭然である。

「はじめは無事か。なら、これで家の周りに結界を張って待っててくれないか？」

明は咄嗟に戦力より生徒の無事を選んだ。

さつきに結界用の札を数枚と念のために他の符も渡した。

「え？」

困惑するさつきを置いて、一路、学校を目指して走り出した。

既に事態は進行していて・・・（後書き）

ちょっと今回は短め。

うつしみについても次回詳しく説明します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7447x/

ぬ～べ～転勤する

2011年11月26日23時48分発行